

聯する問題で、一度も転職したことの無い青年の割合は、インドやユーゴスラヴィア等で異常に高いのは例外として、先進国中では日本の六〇・四％というのが最高の数値を示しています。然し、西ドイツ五二％、フランス五一・二％ですから、これもアメリカの二三・三％にくらべれば定着率の高い方です。ところで日本の場合定着率の高さを示す一方、仕事の上での競争感が無いことも世界一で、わずか一七・六％しか競争を意識して居りません。

国家社会に対する満足感となると、これはまた日本の青年層の不満足度は異常で、何と七三・五％も不満足という回答が返ってきております。これはフランスに於て八五％、その他諸国で六〇％以上が何れも「満足」または「やゝ満足」としているのに対し、由しき問題と考えなければならぬのではないのでしょうか。この国家社会に対する不満の内容として、更に細分化した質問を試みると、我が国の場合、国が国民の福祉や権利を十分守っていないとする者、九八・五％であり、産業開発を優先して個人の生活を不幸にしているという考えを持つ青年が九〇・四％も居るのであります。それが事実であるか否かではなく、そういう意識を今の日本の青年層が持っているということ、然もそういう不満を持ちながら、自らこれを良くする為に積極的に参加するという行動をとらず、極めて無関心、冷淡、投げやりである、という所にまた問題があります。

無関心と言えば、三無主義、あるいは四無主義という言葉を知りましょうか。無気力、無責任、無関心が三無主義、これに無感動を加えて四無主義となるのですが、この傾向が今の若者達に蔓延しているというのです。これは全国勤労青少年会館の相談室が先頃まとめた、勤労青少年の職業相談に見られる意識調査であります。相談室を訪れる若者達の多くは、椅子に腰かけるやいなや「何かいゝ仕事はないでしょうか……」「適性検査をしてくれませんか……」と言うそうで、係員が、「君の気持はどうなのか」と聞いても、「別に希望ありません」という答が返ってくるだけで、全く他力本願だといえます。「生き甲斐のある仕事につきたい」と口では言うものの、それはどんな仕事かという中味については、適性検査をしてそちらで考えてくれ、という態度です。つまり「何をしたらいいか」という受動的な相談ばかりで、「何をしたい」という、自ら意志を持った積極的な相談が少ない、と係員は嘆いて居ります。これを思い合わせてみますと、日本の青年が人生の目標としてやり甲斐のある仕事を求め、仕事を通じて自己を生かすことを、他国の青年以上に望んでいるという総理府の統計も、また別の角度から考え直してみなければなりません。定着率の問題でも、最近の労働省の統計では、中学校を卒業して就職した者の離職率は年毎に高まって、五年で七〇％以上となって居ります。

最後に、「三〇年後にはもっと住みよい社会になっていると思うかどうか」という設問があり

ますが、この問題については、先進国のすべての青年が悲観的であったということを、極めて重視しなければなりません。「住みよい社会になる」という答は、アメリカの四〇・四％が最も高く、日本二八・五％、スウェーデン二三・三％、フランス一九・六％、スイス一九％でしかありません。

以上述べてきた現代青年の意識調査によっても明らか様な様に、物質的繁栄を追求し続けて来た先進国の人々は、今その極限に到って生きることに空しさをさえ覚えているのであります。「一個の生命の重みは全地球のそれよりも重い」という厳肅な宣言の、何とぞらしく響く時代でしょう。「いのちは玉よ」と玉のいのちをひしと抱いて、これをいとおしんだのは寧ろ動乱の世の人々でした。然るに今この平和の日にいのちの喜びを失った絶望感を、皆様は何と受け止められるでしょうか。言うまでもなく、私は決して平和を否定するものではなく、また産業の発展を喜ばぬものでもありません。然し、問題は今この平和と繁栄の中に潜む現代の危機であって、我々はこれから眼をそらしてはなりません。ある意味に於て、今日程我々産業人の鼎の軽重が問われている時もないのであります。今回の大会のプログラムの意義が、正にこゝにあるということに、賢明なる皆様は既にお気付きでありましょう。

平和の重みに耐え得る者

これをこそ真の強者という

戦争でいのちを捨てるよりも、平和と繁栄の中で玉のいのちを燃焼させ、己がいのちの喜びを静かに噛みしめることは、はるかに難しいことなのです。然し、我々は今これに挑戦しなければなりません。

黄金の十字架、茨の冠――

これぞ苦悩する現代先進工業国の人々の姿であります。今こそ我々ロータリアンはこの茨の冠に耐えて、すべての人に生きる喜びを分かちつくべく、生きて甲斐あるこの世にすべく、雄々しく立ち上がろうではありませんか。皆様の胸に輝くロータリーの金の徽章は、今皆様にとって黄金の十字架であります。この十字架を負って病める現代を救えとの、天来の声に耳を傾けて下さい。この年のこの祭典は、これによって世紀の祭典となるであります。

